春季特別展

越前肖像画展

5月1日～5月31日
（期間中無休）

① 重文 朝倉敏景画像　　福井市 心月寺蔵

④ 結城秀康 土屋・永見両臣画像　　武生市 龍泉寺蔵

春季特別展

越前肖像画展

福井市立郷土歴史博物館

越前肖像画展展示品目録

①重要文化財　朝倉敏景画像　絹本着色　一幅　福井市　心月寺蔵

②重要文化財　朝倉義景画像　絹本着色　一幅　〃

二画像ともに、有髪僧形（法体像）であり、筆者及び制作年代は明らかでないが、敏景像の方が古い。

絵絹は、縦吹寄せ、横は等間隔の平織素絹で、打込みは敏景の方が緻密である。敏景像の描線は、細く鋭い肥瘦のない線で、大和絵的手法を駆使し、義景像のそれは、白描の際用いると同様な手法で、割合自由な表現がとられている。

義景像の画賛は、心月寺第九世観溪純察（朝倉氏治下における心月寺の最後の住職）の筆になり、義景歿後、余り年月を経ない時期のものと思われる。

尚、表装に用いられている花鳥刺繍織の裂地は、室町末期より江戸初期頃の、極めて高度な技術で織上げられた能衣装で、価値が高い。

両画像とも、はじめ富山の光厳寺に伝来し、のち朝倉氏一族の中嶋氏が、心月寺に寄進したものであり、昭和四十五年五月、重要文化財に指定された。

〔朝倉孝景（敏景）〕

越前朝倉氏第六代家景の嫡男として、正長元年（一四二八）に生まれる。一般には敏景の名で知られているが、その活躍期には専ら孝景を名乗った。

越前守護斯波氏の家臣として次第に擡頭し、越前国内の庄園を次々に押領、勢力を伸張する。応仁の乱が起るや、はじめ西軍に属して奪戦、文明三年（一四七一）に至り、越前国守護職任

命を条件に東軍に転じた。

これを契機に、越前国内の対抗勢力である甲斐・二宮・千福等の諸氏と戦い、或いは滅ぼし或いは家臣化して、着々と越前の一円領国化を進めた。文明十三年（一四八一）、五十四歳の時、甲斐氏との対陣中に病歿したが、ほぼ越前全域を手中に収め、一大戦国大名朝倉氏の基礎を確立した。

また、彼が制定したと伝えられる十七ヶ条からなる我国最古の分国法は、戦国大名の領国統治の基本的な姿を示すものとして著名である。

〔朝倉義景〕

越前朝倉氏第十代孝景の嫡男として、天文二年（一五三三）に生まれる。初め延景、のち足利十三代将軍義輝の一字を賜わって義景と改めた。

一族の勇将朝倉宗滴（教景）の後見を得て、越前における勢力を維持拡大し、朝倉氏の最盛期を出現させた。一方朝倉氏歴代中、最も風雅の道に関心が深く、本拠一乗谷に京風の武家文化を開花させ、関白二條晴良、連歌師宗養など、多数の公家、文化人が来遊した。

父祖以来、百余年にわたって干伐を交えてきた加賀一向一揆との戦に決着をつけるべく、宗滴に命じて討たしめたが果さず、永禄十年（一五六七）、足利義昭の調停を得て、一女を本願寺教如に妻わすことを条件に和睦する。

その後、浅井長政、本願寺顕如、武田信玄等の諸勢力と結んで、織田信長に対抗、元亀元年（一五七〇）、浅井氏と連繋して、織田・徳川の連合軍と姉川に戦かったが敗れる。一旦和議の後、天正元年（一五七二）、再び信長の来攻にあい、北近江の合戦に大敗、一乗谷を捨てて大野の六坊賢松寺に逃れ再起を期したが、一族朝倉景鏡の謀叛にあって、四十一歳で自害した。

③堀　秀政画像　一　幅　福井市　長慶寺蔵

〔堀　秀政〕

初め美濃の斎藤氏、のち織田信長に仕えた武将で、天文二十二年（一五五三）に生まれ、久太郎と称した。

天正六年（一五七八）頃、近江（滋賀）長浜城主となり、二万五千石を領し、同九年には、若狭小浜城に移る。翌十年、羽柴秀吉の毛利氏攻略を援助するため、信長から先発を命ぜられ、備中（岡山県）に出陣したが、まもなく本能寺の変による信長の死去を聞き、そのまま秀吉に属して明智光秀討滅に活躍した。

同十一年（一五八三）、秀吉と柴田勝家が戦火を交えた賤ヶ岳の合戦では、東野山を守って軍功をあげ、進んで越前に入り北ノ庄城（福井）を攻略して、近江佐和山城九万石を与えられた。その後も、長久手の戦、紀伊根来の一揆討伐等、各地に転戦して武名をとどろかせ、同十三年八月越前北ノ庄二十九万石の城主となり、秀吉より羽柴の姓を許され、羽柴北ノ庄侍従と称した。

同十八年（一五九〇）三月、三十八歳の時、小田原征討に先鋒として出陣、五月陣中で病歿した。

(1)堀　秀政制札　　一　通　坂井町　春日神社蔵

④福井初代藩主結城秀康・土屋左馬助・永見右衛門画像　紙本着色　　一　幅　武生市　龍泉寺蔵

図の中央が結城秀康、向って右が土屋左馬助、左が永見右衛門である。

筆者も製作年代も不詳であるが、結城秀康の菩提寺福井の孝顕寺の開山洞授和尚が賛を加えているから、三人の歿後まもなく描かれたものであろう。以後、孝顕寺の什宝として伝来したが、明治末年か大正初年頃龍泉寺に移管された。

〔結城秀康〕

徳川家康の二男として、天正二年（一五七四）に生まれる。同十一年、小牧長久手の戦の後、豊臣秀吉の養子となり、更に同十八年下野国結城（茨城県結城市）の名門結城晴朝の養子となって、結城十万石を相続し結城宰相と称した。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に、秀康は下野国小山（栃木県）に布陣して上杉景勝に備え、その功によって、一躍越前六十八万石の大大名に任ぜられ、翌年北ノ庄（福井市）に入城、柴田勝家以来の北ノ庄城を大幅に改築して規模を拡張すると共に、城下町を修築し、名ある武将を始め一芸一能あるものを広く天下に求め優遇し、類を見ない雄藩を作り上げたが、慶長十二年（一六〇七）、三十四歳で歿した。

秀康に対しては、諸大名も弟の身で二代将軍となった秀忠に対すると同等の礼をとって畏服し、秀忠将軍も特別の厚遇をもってのぞんだので、越前家は他の大名とは別格の扱いをうけ、「御制外の家」と呼ばれるに至った。

〔土屋左馬助正明〕

天正九年（一五八一）に生まれ、はじめ徳川家康に仕えたが、のち結城秀康の臣となり、大野三万八千石の城主となる。慶長十二年（一六〇七）四月八日、主君の秀康が北ノ庄城で歿するや、三日後、二十七歳の正明も自ら割腹して秀康に殉死した。

〔永見右衛門尉長次〕

天正十二年（一五八四）に生まれ、生母は徳川家康の従妹と伝えられる。別に吉望とも名乗った。十八歳で結城秀康に仕え、北ノ庄入城後一万五千三百五十石を領した。慶長十二年（一六〇七）四月八日、主君秀康が歿するや、翌日二十四歳の若さで主君に殉死した。

(1)結城秀康自筆書状　一通　東京都　松平宗紀氏蔵

十月三日付、秀忠宛の自筆書状で、天正十五年（一五八七）のものと推定させる。

(2)結城秀康書幅　「現無量神力」　一幅　東京都　松平宗紀氏蔵

(3)結城秀康黒印状　一通　武生市立図書館蔵 佐久間家旧蔵文書

慶長六年（一六〇一）五月、越前に初入国した秀康が間もなく発したもの。

⑤福井四代藩主松平光通画像　絹本着色　一幅　福井市　大安寺蔵

冠をつけ、太刀をはき、平緒をたれ、有紋黒綾の袍を着た姿で、これは江戸時代五位以上の者が着用した正装であり、大名にとっては公式の第一等の礼装であった。

太い眉に鋭い眼等、威風堂々たる容姿が描かれており、松平春嶽の随筆「真雪草子」に、光通の在世中に描かしめたもので、大安寺第一の重宝であると記され、光通の命を受けた画臣狩野元昭（一六二二～一六八一）が斎戒して写生したものである。元昭は福井藩絵師狩野了之の嫡男で、狩野安信に画技を学び、光通に寵愛された。

〔松平光通〕

寛永十三年（一六三六）福井三代藩主松平忠昌の嫡子として生まれ、正保二年（一六四五）父の逝去の後、四代藩主となる。光通は、家中定十六ヶ条、保民の規定三ヶ条・寺院造作制限令六ヶ条など諸制度を発布し、藩の内政を充実させると共に、文教にも力を尽し、京都より儒医伊藤担庵を招いて藩士の教育にあたらせ向学の気風を養わせると共に、名僧大愚禅師を招請して大安寺を建立、また、万治三年（一六六〇）新田義貞の戦歿地に新田塚を建碑するなど士風の高揚にもつとめた。

一方、寛文九年（一六六九）の大火で天守閣を始め福井城の過半は焼失し、以後天守閣は再建されなかった。光通の施政は、温順にして慈愛に満ち領内の崇敬を集めたが、延宝二年（一六七四）三十九歳の時、突然自刃したと伝えられている。

(1)福井県指定文化財　双雀梅花図　一幅　福井市　大安寺蔵

松平光通が大安寺に寄進しもので、宋の馬麟筆と伝える。

(2)松平光通自筆書状　一幅　福井市春嶽公記念文庫蔵

(3)松平光通書置（遺書）写　二通　〃

松平光通は、延宝二年（一六七四）三月二十四日、福井城内で突然自刃し、城中は大騒動となった。しかし、弟兵部大輔昌親を養子とし家督を譲る旨の書置（遺書）があって、幕府の許可も出、事なきを得た。

これは、その折の遺書の写しで、包紙上書によれば、寛文十一年（一六七一）頃、あらかじめ書置いたもので、自刃後、直ちに江戸の老中へ送られたものであることが知られる。

(4)松平光通朱印状　一通　奈良市　金屋慶治氏蔵

寛文十二年（一六七二）三月、福井の豪商金屋家に宛てたもの。

⑥福井五代藩主松平昌親（七代吉品）画像　絹本着色　一幅　福井市　瑞源寺蔵

松平昌親を開基とする瑞源寺に伝来したもので、画像上部の賛からも、昌親の肖像であることが知られる。絵師や製作年代は不詳である。瑞源寺は、昌親が延宝元年（一六七三）、母光照院の菩提所として、吉江より移して開いた寺院で、光照院及び昌親の墓がある。

〔松平昌親（吉品）〕

寛永十七年（一六四〇）福井三代藩主忠昌の末子として福井に生まれる。父の逝去後、吉江（鯖江）に二万五千石の分封をうけ、吉江居館を構えたが、延宝二年（一六七四）四代藩主光通（兄）の遺言により福井五代藩主となった。しかし、光通には子直堅があり、松岡には光通の庶兄昌勝がいて、昌親の相続は順位をみだすものとして藩内に動揺があった。そのため昌親は、まもなく兄昌勝の子綱昌を養子とし、延宝四年（一六七六）在職二年にして隠居した。

後を受けて六代藩主となった綱昌は、悪病のため政務を見ることが不可能となり、これが幕府の忌むところとなって、貞享三年（一六八六）綱昌は蟄塞を命ぜられ、藩領は半減して二十

五万石となった。これを「貞享の大法」と言う。一旦隠居していた昌親は、幕命により再び藩主（七代）の座にもどり、吉品（よしのり）と改名して、減封後の藩政立直しに努力し、正徳元年（一七一一）七十二歳で歿した。

(1)松平昌親書状　一通　武生市立図書館蔵 佐久間家旧蔵文書
(2)松平昌親朱印状　一通　奈良市　金屋慶治氏蔵
延宝五年（一六七七）十二月、藩の御用商人金屋家へ宛てたもの。
(3)松平吉品所用具足　一領　福井市　野坂格氏蔵
(4)松平昌親所用什器類　五点　福井市　瑞源寺蔵
⑦福井十六代藩主松平慶永（春嶽）画像　一幅　東京都　松平宗紀氏蔵

〔松平慶永〕

文政十一年（一八二八）九月二日、徳川宗家の親族田安斉匡の八男として生まれ、天保九年（一八三八）十一歳の時、越前松平家の養子となり、福井十六代藩主に就任した。当時藩は財政難にあえいでおり、慶永は若くして藩財政立直しに着手し、本多修理、中根雪江、鈴木主税、橋本左内等を登用し、熊本の横井小楠を招いて政治的手腕を発揮した。さらに若い藩士に洋学教育をすすめ、時代の動きを感じとらせ、王政復古に際し、それらの人々は重大な役割を果した。

藩外では、日本が攘夷か開国かという重大問題に直面し、尊皇敬幕で開国論を唱えた慶永は、老朽化した幕政を雄藩連合で改革、朝幕融和の立場をとり、同じ開国論者ではあったが、譜代大名だけで幕権をさらに伸ばそうとする立場をとる井伊直弼と対立、ことに将軍継嗣問題をめぐって激突し、安政五年（一八五八）井伊直弼が大老となるや、慶永は隠居謹慎の身となった。

しかし、井伊大老の死後、政事総裁職に任ぜられ、朝幕の間に立って維新回天の大業に貢献

した。島津久光、伊達宗城、山内容堂と並び幕末の四賢公と称せられる。明治二十三年（一八九〇）六十三歳で歿した。

(1)松平春嶽書幅「敏徳」（嘉永六年　二十六歳の書）　一幅　福井市春嶽公記念文庫蔵

(2)十二代将軍家慶より拝領の銀細工物等　精巧玩具類　七十六点　〃

⑧福井十七代藩主松平茂昭画像　一幅　東京都　松平宗紀氏蔵

〔松平茂昭〕

天保七年（一八三六）越後糸魚川藩主松平直春の子として生まれ、安政四年（一八五七）糸魚川藩一万石の藩主となる。はじめ直廉と名のり巽嶽と号した。安政五年（一八五八）七月、井伊直弼との政争に敗れて隠居急度慎を命ぜられた松平慶永（春嶽）のあとをついで、福井十七代藩主となる。幕末、激動多難な中に、よく藩を治め、政局の中心にあった養父慶永をたすけた。しばしば国政に参加して建議し、長州征討にあたっては副将として出陣、また会津征討にも藩兵を指揮した。

維新後、進んで版籍奉還を行ない藩知事となり、侯爵を授けられ、明治二十三年（一八九〇）七月、五十五歳で歿した。

(1)松平茂昭筆「孫業堂」の扁額　一額　本館蔵

(2)松平春嶽同茂昭賞典状　一通　武生市　笹生常太郎氏蔵

⑨武田耕雲斉画像　一幅　敦賀市　松原神社蔵

武田耕雲斉が、越前敦賀の新保宿に滞陣中の姿を描いたものといわれる。筆者は、耕雲斉に心酔し、最後まで行動を共にした、水戸藩準藩士須木直正（藤介）で、写生同様に描いたものである。

〔武田耕雲斉〕

水戸藩士。名を正生、通称を彦九郎といった。耕雲斉は後年の号である。藩主徳川斉昭の擁立に尽力し、改革派に属する重臣として活躍、安政三年（一八五六）家老職にすすみ、尊王攘夷運動を展開して名声をあげた。

元治元年（一八六四）三月、攘夷の実を示さず、因循な幕府の態度に抗議して、藤田小四郎等が筑波山（茨城県）に挙兵するや、遂に七月に至り耕雲斉も、水戸のいわゆる天狗党を率いて兵をあげ、小四郎等と合し、水戸尊攘派の先頭に立つこととなった。十月、幕府軍と那珂湊（茨城県）に戦って敗れ、丁度京都で禁裏守衛総督を勤めていた一橋慶喜をたよって上京し、朝廷に挙兵の原因を奏上し、素志を天下に明らかにせんと一決し、時には諸藩の防禦隊と激戦を交えつつ、下野（栃木）、上野（群馬）を経て信濃（長野）に出、更に美濃（岐阜）から蠅帽子峠を越えて越前に入り、十二月十一日木ノ芽峠を越え新保に着陣したが、周囲を諸藩の兵に包囲され、遂に加賀藩に投降した。翌慶応元年（一八六五）二月、敦賀の松原で、主だった同志三百五十三名と共に、六十三歳で斬首される。

(1) 武田耕雲斉書幅　一幅　敦賀市　松原神社蔵
(2) 武田耕雲斉所用陣羽織　一領　〃
(3) 武田耕雲斉所用軍扇　一握　〃
⑩ 橋本左内画像並小伝　紙本墨書　一幅　福井市春嶽公記念文庫蔵

橋本左内歿後十六年を経た明治八年に、橋本家からの依頼により佐々木長淳が記憶をもとに描いた肖像と、同年五月二十一日付の松平春嶽筆橋本左内小伝とを一幅に仕立てたものである。

長淳は福井藩士として天保元年に生まれ、御製造方頭取役に任じ大小銃砲・火薬・蒸汽船等の製造に当った。慶応三年四月、兵器購入の命を帯びて米国に出張、維新後は工部省に出仕し活躍した。橋本左内とは親戚である上に年齢も近く、共に蘭学を研究し、常に親しく交わった

間柄であった。

〔橋本左内〕

天保五年（一八三四）、福井藩医橋本長綱の子として生まれる。名は綱紀、景岳、藜園などと号した。幼少より漢学を福井の吉田東篁に学び、十六歳で大阪緒方洪庵の適塾に入門、更に江戸に遊学して坪井信良、杉田成卿の教えを受けて蘭学を研鑽、早くより英才の聞えが高かった。師坪井信良が兄に宛てた書翰の中には、二十一歳の左内を「頗ル沈才篤厚、誠ニ頼母敷キ人物、（中略）実ニ畏ルベキ羹ムベキ一俊才ニ御座候。」と評していて、その人物と学識がうかがわれる。

藩主松平春嶽に、その学才と識見を認められ、安政二年（一八五五）二十二歳で医員を免ぜられ藩政に参与し、藩校明道館を主宰して洋学科を開設するなど、すぐれた世界観と政治理念で人望をあつめた。将軍継嗣問題が起るや、慶永のもと一橋慶喜を擁立すべく京都、江戸に活躍、大いにその抱負を行なわんとしたが、安政五年（一八五八）「安政の大獄」に捕えられ、翌六年十月、二十六歳で斬に処せられた。

(1) 橋本左内幼時所用の上下（裃）　一領　本館蔵
(2) 橋本左内自筆記帳類　五冊　福井市春嶽公記念文庫蔵
　　一幅　大野市郷土歴史博物館蔵

⑪吉田拙蔵画像　紙本着色

〔吉田拙蔵〕

文政九年（一八二六）大野藩士の家に生まれ、名は俊章、静斉と号した。拙蔵は通称である。嘉永五年（一八五二）、藩主土井利忠に従って江戸に出、安井息軒・塩谷宕蔭等に漢学を学び、かたわら石河正竜や杉田成卿に入門して洋学の研鑽につとめた。安政元年（一八五四）より、江戸藩邸内の共和塾で藩士に蘭学を教授し、翌年大野に帰郷して藩校の蘭学教授となり、多数

の藩士を教育した。大野藩が全国に類を見ぬ程に、蘭学研究上の業績を残し得たのは、拙蔵の力に負う所が大きい。安政三年（一八五六）、大野藩が幕府の許可を得て蝦夷地（北海道）開拓に乗りだすや、拙蔵もこれに参加し、幕府の海軍所で航海術を学び、藩の洋式船大野丸の船長として、蝦夷に往復した。

幕末維新の難局に際しても、よく藩をささえ、維新後、新政府の権少参事、少参事を歴任、更に足羽県、敦賀県、石川県時代の郷土の教育事務行政に活躍し、明治二十年（一八八七）六十二歳で歿した。

(1) 吉田拙蔵書幅　一幅　大野市郷土歴史博物館蔵

(2) 柳陰紀事　吉田拙蔵編　土井利忠伝　一冊　本館蔵

⑫ 橘　曙覧画像　絹本着色　一幅　高槻市　井手孟雄氏蔵

慶応四年（一八六八）正月、武生の絵師越智通兄（河野菱渚）が、実際に写生した曙覧晩年の肖像であり、橘家では「春嶽公より拝領した白紬の袷を着て、コタツに入っているところを描いてもらった。」と言伝えている。曙覧も、この絵の出来栄えを喜び、「雲ならで通はぬ峯の岩かげに、神世のにほい吐く草の花」と自筆の賛歌を付した。

〔橘　曙覧〕

清貧の中で国学と作歌に精進「万葉集」の歌風を慕い、近世末期の国学の精神に燃えて独自の新しい歌風をたてた一人である。

文化九年（一八一二）福井石場町（つくも一丁目）の紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれ、幼名は五三郎、初め尚事、後曙覧と改めた。正玄家は北ノ庄時代から旧家として知られた

木田橘家七屋敷の一つである。曙覧二歳の時、母鶴子が死亡したので、少年時代は府中（武生）の母の家で養われた。その後、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、後京都の児玉三郎の塾に入り漢学を学んだが、数月で家に呼び戻され、三国酒井清平の娘直子と結婚。家を異母弟宣に譲り、足羽山に隠棲（黄金舎）した。更に飛弾高山の国学者田中大秀に就き、大いに得る所があった。三十七歳の時、三ツ橋（照手三丁目）に移り、以後この家を藁家と号した。曙覧の歌人としての業績は、ほとんどこの藁屋でなされ、のち松平慶永（春嶽）によって志濃夫廼舎と改められた。慶応四年（一八六六）八月二十八日、五十七歳で歿した。

(1) 笠原白翁宛　橘曙覧書状（二枚折屏風）　七通　福井市　加藤二一氏蔵
(2) 岡崎左喜助宛　橘曙覧書状　一通　高槻市　井手孟雄氏蔵

⑬福井藩御用商人　金屋吉広・吉治・吉矩（十・十一・十二代）画像　三幅　奈良市　金屋慶治氏蔵

〔金屋家〕

金屋家は、国家の系図によれば、はじめ北ノ庄氏を称し、室町時代初頭より福井にあって朝倉氏に仕えていたという。七代吉正（弥助）の時、金屋と名乗り「鉄剣萬物諸商」業をはじめ、福井藩祖結城秀康の北ノ庄築城に協力、御用商人に取りたてられた。以後、代々福井藩の御用をつとめ、苗字帯刀を許され、福井城下のほか三国、鯖江などにも多くの出店を持ち、のちには京都にも支店を営業するなど豪商として全国に聞こえた。四代藩主光通の時、当主七兵衛吉広は我国最初の福井藩寛文札の元締となり、足羽山の一画に別荘地を与えられている。

藩に多くの御用を収め、上方の名商角倉家と婚姻を結び、紀州家など、他国の大名へも貸付けを行うなど江戸中期頃全盛をきわめたが、のち次第に衰微した。

(1) 福井藩々札（両替札座　金屋家）　二十一枚　奈良市　金屋慶治氏蔵
(2) 松平出羽守直政　折紙状　片口（金屋）七兵衛宛　二通　〃

⑭福井県指定文化財　道元画像　絹本着色　一幅　大野市　宝慶寺蔵

道元が上半身を左向きにして月を見上げている様子を写したと伝えられる頂相（禅僧の肖像画のこと）で、「観月の御影」と呼ばれている。道元の在生中に描かれたもので、永い修養生活に徹し、深い悟の境地に至った風格を伝える貴重なものである。上部の偈は、建長元年（一二四九）、道元自らが賛したものである。

〔道元〕

曹洞宗の開祖で、希玄と号した。久我通親、藤原基房の娘を父母として正治二年（一二〇〇）京都に生まれる。建暦二年（一二一二）、十三歳の時、比叡山に出家し、三井寺の公胤僧正、建仁寺の栄西、同じく旺全等に師事し修業を重ねた。貞応二年（一二二三）、師明全と共に宋に渡り諸寺を歴訪し、天童山の如浄のもとで修学、安貞元年（一二二七）帰国する。

その後、「普勧坐禅儀」を撰述、「正法眼蔵」の著述を開始し、宇治の興聖寺を開創して、孤雲懐奘をはじめ多くの僧俗の帰依を受けた。更に京都への教線拡張を計ったが、叡山の圧迫により興聖寺を破却され、追放される。これを契機に、深山幽谷に隠棲して求道精進することを理想とし、寛元々年（一二四三）越前国志比庄の地頭波多野義重の勧めを受け、越前に下向、はじめ吉峰寺に、翌年大仏寺に移り、同四年（一二四六）大仏寺を永平寺と改称して、「正法眼蔵」九十五巻の著述を終えた。

道元の目標は、真実の仏法（正法）の探求とその実現にあり、禅宗は勿論、曹洞宗、臨済宗の称も否定し、仏祖単伝の宗名なき全一の仏法の宣場に生涯をかけ、建長五年（一二五三）、五十四歳で入滅した。

(1)道元禅師行業記（建撕記）　一冊　本館蔵

永平寺第十四世住持建撕が編輯した道元の伝記で、応仁より文明にまたがる時代（一四七〇

年頃）に書かれたものとされている。原本は所在不明であるが、数種の古写本が伝えられ、ここに展示したものは、現在知られているものの内、二番目に古く、延宝八年（一六八〇）に書写されたものである。

本書は、道元の伝記史料中、最もすぐれたもので、殊に本館のものは、道元の詠歌を載録する唯一の伝本で、その点でも貴重視されている。

(2) 国宝普勧坐禅儀（複製本）　一巻　本館蔵

⑮蓮如画像　絹本着色　一幅　大野市据　最勝寺蔵

蓮如在世中に描かれた老年期の寿像である。裏書より蓮如入寂の前年、明応七年（一四九八）十月に、実如が最勝寺に交附したものであることが知られ、蓮如自身も、これに署名と花押を書加えている。

〔蓮　如〕

本願寺第七世存如の長子として、応永二十二年（一四一五）に生まれる。長禄元年（一四五七）、父の跡を継いで本願寺第八世となり、当時衰微の極にあった本願寺再興を決意し、まず近江で、続いて関東諸地域や越後で布教につとめた。

文明三年（一四七一）、父祖以来の北陸本願寺教団の継承発展をはかるため、吉崎に坊舎を構え、文明七年に至るまで北陸布教の拠点とした。蓮如の吉崎における教化活動として、注目すべきものには、「御文章」（御文）を門徒に発して教義を平易化し、また日常勤行の定位化をはかり、真宗における聖教出版の最初で地方版としても注目に値する「三帖和讃並正信偈」を文明五年（一四七三）に開板したことや、多数の名号や絵像を本尊として下付することにより、本山↓手次坊主↓門徒という教団組織を強化し、覚如が打出した本願寺教団が、蓮如により確立されたこと等があげられる。

その後蓮如は、山科に本願寺の再興をはかり、明応五年（一四九六）には大阪石山に坊舎を建立、大いに教勢を伸長したが、同八年（一四九九）八十五歳で入寂した。

(1) 御文章（御文）　五　冊　大野市据　最勝寺蔵

〔模写等参考史料〕

⑯金森長近画像　一　幅　大野市教育委員会蔵

慶長十四年（一六〇九）、金森長近の子可重が、亡父の菩提所として建立した飛騨高山の素玄寺に伝来した画像を、近年模写したものである。尚、原図は可重が描かしめ、素玄寺に寄進した。

〔金森長近〕

織田信長に仕えた武将で、大永五年（一五二五）に生まれ、五郎八と称した。天正三年（一五七五）八月、信長の越前一向一揆平定に従軍し、美濃口より大野郡に攻め入り、平定後大野郡の三分の二を与えられ、亀山（現大野城跡）に築城した。大野城主時代の長近の施政として、城下の商工業者保護策が良く知られている。鍛冶屋、大工、桶屋等は一定の人数以外は商売を許さず、新たに座を営むことを禁止し、保護を与える者は指定の住所に居住させるなどしたのがそれである。

天正十一年（一五八三）、柴田勝家の滅亡後は豊臣秀吉に属し、同十四年飛騨一国三万八千七百石余に封ぜられ、高山城主となる。剃髪して素玄と号し、古田織部正に師事して茶道の奥儀を極めた。関ヶ原の合戦には、徳川方に属し軍功があり、美濃国上有知（現美濃市）を所領に加えた。慶長十二年（一六〇七）八月、八十四歳で歿す。

(1)金森長近所用具足　一領　武生市　金森穆氏蔵

(2)鍛治座関係文書　二通　福井市春嶽公記念文庫蔵

大野城主時代の金森長近の商工業保護策を示す古文書として著名なものである。

⑰小笠原政信画像　一幅　勝山市　松井つね子氏蔵

⑱小笠原政信母画像　一幅　〃

勝山初代藩主小笠原貞信の養父政信と、政信の生母の画像である。原図は寛永年中の作であるが、これは幕末から明治頃模写したものと思われる。

〔小笠原政信〕

下総国古河（こが）（茨城県）二万石の領主で、慶長十二年（一六〇七）に生まれる。小笠原家は鎌倉時代以来の名門で、祖父信嶺は織田信長、徳川家康に仕え、父信之は酒井忠次の三男で、慶長十七年（一六一二）下総古河城主に任ぜられた。政信は、寛永十七年（一六四〇）三十四歳で歿したが、養子にむかえた貞信が、下総関宿、美濃高須（岐阜県）を経て、元禄四年（一六九一）、勝山二万二千七百石余に封ぜられて勝山藩主となり、以後子孫相継いで明治維新に至った。

尚、この勝山藩主小笠原家は、室町、江戸期を通じて、弓馬の術や武家の故実典礼の諸作法として用いられた小笠原流の開祖小笠原貞宗の後裔にあたる名家で、寛永十九年（一六四二）、幕府が林道春に命じて「寛永諸家譜」を編纂させた際、貞信が伝来の家系旧記を示して、小笠原氏一族の総領職たるべき命を受けている。

⑲岩佐又兵衛画像　紙本着色　一幅　本館蔵

岩佐又兵衛の自画像と伝えられるものを、近年模写して旧福井市立図書館が所蔵していたものである。原図は、現在静岡の世界救世教本部が所蔵している。

〔岩佐又兵衛〕

織田信長に仕えた武将荒木村重の子として、天正六年（一五七八）に生れる。名は勝以（かつもち）、又兵衛と称した。父村重が信長に背いて失脚の後、わずか二歳で本願寺に逃れ、成長後土佐光則等に画法を学び、大和絵、宗光水墨画の古法に倣（なら）い、逐に一家を成す。元和二年（一六一六）頃、福井藩主松平忠直に召抱えられ、画技をもって一世に鳴った。寛永十四年（一六三七）以降、将軍家光に招かれて江戸に出、川越喜多院の「三十六歌仙図」奉額をはじめ、尾張光友に嫁（とつ）ぐ家光の長女千代姫の装具類を描くなど将軍家の御用も勤めた。

「源氏物語図」「伊勢物語図」「和漢風俗図」「合戦図」「耕作図」など、古典的主題を能くしたが、これに近世的で斬新な表現を与え、主情的な作風が多い。慶安三年（一六五〇）江戸に歿し、遺骨は福井の興宗寺に葬られた。

福井市立郷土歴史博物館

福井市足羽１丁目８―16
ＴＥＬ(35)―2845

昭和51年４月30日発行